

警視廳の刑事が二人来て、品川驛へ行くまでに、君が昂奮したら狂人病院へ入れるぞと言つた。

俺は監獄へ行く事を恐れてはゐなかつた。

けれども壊はされた俺の頭と體とを、人間を平等に見ようとする主義者の手に、委託しては瘴
らないだらう。

此の際『死は言葉であるとか』俺は死を征服したものゝ如く振舞ふた。

生を逃避するものが達人なのか。

俺は品川の留置場に一晚とまつたか何うかハッキリしない。

兎に角俺が乗り込むと、汽車のスチームを消して了ふのだ。

乗客を次の客車へ追つ拂つて、俺と刑事と醫者と四五人丈が、一客車を占領するのだ。

俺は時々脊中が熱いので、裸になつて冷す頭腦は次第に朦朧錯雜を來し、物の識別も困難にな
つて來た。

俺は食欲が全然ないのだ。

牛乳一合も飲み得ないのだ。